

留学生の授業に日本の歌を導入する試み

——歌を歌うことが「日本事情」科目にどのような広がりを見せたか——

チャン・チェオン・ジェン *

キーワード：唱歌、日本事情、留学生、文化適応

留学生のための授業、「日本事情」に歌を取り入れたきっかけは、教員が持つ音楽教育の専門性を活かして教育効果を高めようとしたからであった。2021 年に導入を始め、今学期で 5 学期目になる。90 分授業の冒頭の 10 から 15 分間を使って、「ふるさと」、「もみじ」、「ゆき」、「春の小川」、「夏の思い出」、「浜辺の歌」を斉唱し、学期によっては「若者のうた」、「夢の中へ」（井上陽水）も歌った。歌う行為を通して体で覚えた文化知識が留学生の生活適応の助けになり、「日本事情」科目の目標に達せうと考えたからであった。

そもそも、さまざまなレベルの留学生が一堂に集まる「日本事情」⁽¹⁾の授業をどう展開すること自体が一つのプロブレム・ソルビングである。授業研究の成果として普遍性を見出せるよう、まず、次の問題を提起する。1) 唱歌が留学生のための授業のプラクティスにどのような効果があったか、そして、2) 唱歌の取り組みが「日本事情」科目に関する理解がどのような広がりを見せたか。教員の観察を述べたのち、受講者の感想文テキストにコーディング分析をした結果を上記の 2 問に照り合わせ、論を展開する。

「日本事情」という科目

外国人留学生の「全体的学習効果を高める」を狙いとする「日本事情」は⁽²⁾、科目設置から 40 年以上立っても授業の方法論のコンセンサスが得られてない⁽³⁾。関連する文献を読めば、「日本事情」教育の実施方法についての論議がすでに一つのディスコースとなっている。「日本事情」は日本語教育の一部として捉える考え方が一つの流れで、語学授業の時間枠内に収められない内容を補強するのが役割だとする。一方、「日本事情」の重点は（母国とは違った）日本の大学での学びのスタイルを習得するためにあるという考えがある。それに関連して、「日本事情」を専門教育に進むための準備教育という考えもある。もう一つの流れは、「日本事情」を異文化理解教育と位置づけ、留学生活に資するための教育として位置づける。

このように「日本事情」教育の方法論は多岐にわたるが、留学生の学習ニーズ（それが語学学習のニーズ、異文化適応のニーズ、学びのスタイルのニーズであれ）に応えるための科目であることに変わりはない。したがって、「日本事情」を、日本という国の事情の中で学修する留学生の様々な学習ニーズに応じて設置された科目と理解している。また、特殊的なニーズに応じる「日本事情」

* 鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構 国際交流センター 教授

科目は、ある知識を専門的に学ぶ科目と区別しなければならない。長谷川は、「日本事情」教育を「複合的学習支援活動」と定義づけている⁽⁴⁾。

私の「日本事情」科目に対する考え方

大学教育のカリキュラムをブルーム分類学⁽⁵⁾に沿って考えれば、各履修科目は、三つの教育目標領域⁽⁶⁾からそれぞれ優先する領域が定められ、違う目標領域の比重を持った科目が相互に補完することによってカリキュラムのバランスを保つ、という前提がある。この前提に立って、留学生に対して学習支援を果たす役割を持つ「日本事情」科目は、認知的領域 (cognitive domain) と精神運動的領域 (psychomotor domain) よりも、情意的領域 (affective domain) の育成が求められると考える。情意的領域は関心・意欲・態度に関わるもので、例えば、学習者自身がどのように学習対象を受け入れ、それを自分なりに評価をし、そしてこれからも学習対象に自ら働きかける意欲を持つなどである。

「日本事情」教育の最も優先すべき目標領域が情意的領域と考えれば、知識の内面化が自然的に授業の焦点になる。日本の文化という「知識」を内面化させるには、学生にできるだけ色々な事物と関わりを持たせ、相互作用を起動させる必要があると考えた。関わる者としての学習者は、単なるオーディエンスではなく、知識と関係性を持つ「参加者」になる。異文化理解の文脈に沿っていえば、学習者がいかに「日本」を自分のものとして関わっていくか、また自分をどう関わらせ、「日本」の中に飛び込むのか、ということになる。

最近の流れとして、「日本事情」という公的枠組みを、日本についての知識を取得することよりも、異文化へ対処する能力の育成に充てる意見が長谷川ら⁽⁴⁾から出ている⁽⁷⁾。文化適応は、「文化順応」とは違い、当事者が自己調整をしながら主動的文化的違いへの解決に取り組むと筆者は理解している⁽⁸⁾。ブルーム分類学の中にも情意面が重視されるように、特に留学生においては情意面での能力の育成が大切と考える。カルチャーショックを受ける留学生のニーズに立って、唱歌がストレス解消、情緒的インパクトを与える効果が大きいと考える。

以上を踏まえて、知識の内面化を図る方法の一つとして唱歌の時間を「日本事情」の授業内容に加えた。

取り組みの経過、詳細

「日本事情」の時間に唱歌を導入する試みの詳細は以下である。90分講義の冒頭の10から15分間を唱歌の時間とする。教員⁽⁹⁾がピアノに座り学生に向かって弾き語りをし、学生はそれぞれの机で振り仮名付きの歌詞のプリントを手に取り、一緒に口ずさむ、という具合である。歌い始める前や、歌の合間に教師が歌の背景について説明をし、歌い終わったあとは拍手など簡単な評価をしてあげる。一回の講義で新曲なら一曲、すでに学んだ曲なら2曲から4曲をそれぞれ1-2回歌った後、次週の講義もまた同じ要領で始まり、同じ曲を繰り返して歌う。学期を通して学生は徐々に歌を覚えていく。

2022年後期の初導入では、歌う時間も短く、「ふるさと」、「もみじ」と「ゆき」の3曲を歌った。「もみじ」と「ゆき」は季節を意識したもので、「ふるさと」は日本の愛唱歌として取り上げた。初実施の感触を得たのち、2023年度前期では夏を意識して「浜辺の歌」、わらべうたの「あんたがたどこさ」、そして高校合唱の定番「夏の思い出」を導入した。「あんたがたどこさ」は手拍子などの動きを通してクラスの雰囲気盛り上げる狙いもあった。

第三学期の実施となる 2023 後期は、前年度前期のレパトリーの三曲の上に、歌やすさを考慮して「若者たち」を加え、アップテンポの曲として井上陽水の「夢の中へ」も取り入れた。この学期から、教師が留学生に日本の歌を教えるコツを掴みはじめたこともあって、学生の歌声がはっきり聞こえるようになり、実際に歌える歌の曲数も増えた。続く 2023 前期では春の歌「春の小川」と鳥取県の夕方の時報にもなっている岡野貞一作曲の「夕焼け小焼け」を加えた。

各学期 21-24 名からなる受講生のうち、韓国、中国と台湾の協定校からの交換留学生が多数を占めていて、そのほとんどが日本語専攻の学部生だった。交換留学生のほか、学部留学生、日本文化研究生と、大学院研究生がそれぞれ若干名いた。日本語ができる前提で行われる講義なので、能力にムラがありながらも、全員読み、書き、発言を全て日本語で行うことができていた。

交換留学生は、前期・後期の順序を問わず、入学した時点からこの講義を二学期通して受講した。学部生や研究生、また一学期のみの交換留学生は一学期だけを受講することもあった。教師としては、毎学期において、新・旧学生が混じる年もあるが、一年サイクルで「日本事情」の受講生が一新する。以下、各学期で導入した曲名を示す。

2022 年後期

故郷
紅葉
雪（ゆきやこんこん）

2023 年前期

夏の思い出
浜辺の歌
あんたがたどこさ
故郷
紅葉

2023 年後期

若者たち（ザ・ブロードサイド・フォー）
夢の中へ（井上陽水）
紅葉
雪
故郷

2024 年前期

春の小川
夕焼け小焼け
浜辺の歌
夏の思い出
あんたがたどこさ

唱歌という新しいタスクに意欲を持たせるために、日本の歌を導入する意味について伝える必要があった。歌の前後や合間に、随時「日本事情」講義で歌を学ぶ意義について説明した。ポイントとしては次である。

1. 唱歌は日本近代学校教育の特徴であり、唱歌を体験することは多数の日本人の体験と共同記憶にアクセスできる。
2. 歌は元来、ある社会の文化、考え、感情を端的に現したものであり、歌を勉強することでその社会の文化を知ることができる。また、歌は記憶に残りやすい。長い年月が経って特定の情景や事柄を思い出すための鍵となる。教員は「帰国してから歌は記憶に残る」と語った。
3. 鳥取出身の作曲者、とりわけ岡野貞一が、唱歌の数々を作曲したので、唱歌を導入することは鳥取への愛着感情を育てることができる。そうすることによって「鳥取留学」に肯定感を与え、留学生活に新たな意味をつけることができる。教師はとりわけ、ふるさとの出だしの「うさぎ」を、白兔神社や JR のスーパーはくと特急などの例を出して、鳥取の地との関連を説いた。

授業観察のナラティブ

教員は当初、躊躇しながら「日本事情」の授業に唱歌を導入した。躊躇の理由は二つある。一つは、学生の反応が予測できなかったことである。もう一つは、学生たちが「歌」を大学授業の一環として認識してくれるかどうか、である。

導入して、早速壁にぶつかった。一部の学生が楽譜へ抵抗感を示した。今までの学校教育で五線譜を読む学習をしてこなかったもので、読み方がわからない、と学生が言った。歌の学習というのは五線譜の旋律に歌詞をつけた表記を使うのが当然である、という日本の学校教室の事情が全ての留学生に通用しないことがわかった。

このことを踏まえ、次の授業からは歌詞のみのプリントに変えた。今度は、歌詞を読むことにハードルがあった。日本語能力の低い学生の方が顕著だが、日本語の歌詞を読み上げて歌うことが留学生にとって馴染みのない、新しい認知作業であることが思い知らせた。

2 回目の躊躇

日本語で歌うことの不慣れを示すかのように、歌の導入をした最初の 4 週間は学生の歌声が薄く、わずかに聞こえる程度であった。不安ではあったが、教員は構わず弾き語りでリードしていた。5 週目あたりになって、学生たちは授業で習った「もみじ」を街のカラオケで歌ったことを教えてくれ、それを聞いて安堵した。一方、特定の学生からは、歌うことに馴染めなくて、歌う時間が「不安でしかなかった」という感想も寄せられた。

教員は複雑な思いで歌の導入を続けて 8 週目に入ると、意外な展開となった。「不安でしかなかった」と記述した学生の態度が急変し、前の席に座り歌詞を持ちながら大声で歌い出した。それと同時にクラス全体の歌声が一段とアップし、やっと歌っている実感を感じさせるような音量となった。日本の教員養成コースのスタンダードから見て決して理想的なレベルではないが、今までにない参与感を見せた。唱歌という新しいタスクに慣れ、自在な状況に入るまで一定の時間が必要であることがわかり、このケースでは 7 週間ほど時間がかかった。ここまできて、やっと唱歌指導の軌道に乗ったと教員が感じた。8 週目からは唱歌の時間が授業の一部として定着した。

こうして一学期を終えたが、授業内容のバランスを考慮して唱歌を次の学期の授業計画から除外した。唱歌は前期の講義に限定しようと考えていた。新学期の初日、講義開始の15分前、廊下で受講生たちに今日は何を歌うのかと聞かれた。急遽、歌詞とピアノの準備をし、歌を教えることになった。こうして、「日本事情」講義冒頭の唱歌時間が、学期問わずに実施することとなり、日本文化事情講義の一環として定着していった。

掴めた確信

毎回講義終了後の感想(100字)を辿ると、実施初めの学期では歌についてのコメントが散見される程度が、第2学期でははっきりと歌を歌うことが楽しいと書いたコメントが多数見られた。実施して第3学期(2023年後期)では、学生の入替えが原因なのか定かではないが、唱歌の時間を楽しむコメントが多数見られ、また歌詞の中で描かれる情景について感想を述べる意見も散見された。教員の感触としては、実施して第3、4学期は、学生の歌声も一段と大きくなり、感想文からも深みのある感想が寄せられ、唱歌の時間が日本文化事情の一環として理解された手応えを覚えている。

特に、一部の学生は歌詞を鑑賞していたことが印象的だった。このことは、2023年後期からの受講生の日本語能力の高さを物語っている。教員はまた、受講生が歌の楽しみへの期待に圧倒された。第三学期の11週目の講義のことである。他の活動の時間を確保するため唱歌を省略したら感想文から残念の声が殺到した。

試行錯誤のすえ教員が留学生に歌を教えるコツのようなものを学習した。まず、学生の反応の薄さに構わず、教員自身が繰り返し歌い通すことが重要である。幼児が周りの大人の話声をたくさん浴びてから初めて自分のことばを発するのと同じように、留学生たちが歌い出すまである程度その歌を聴いて馴染む必要がある。

次に、留学生が歌を楽しめるためには、曲のテンポをだいたい落とす必要があることがわかった。「もみじ」の場合、一般、110~120拍/分で歌われるが、講義ではテンポを90拍/分まで落として歌うと、急に学生の歌声が増大した。普通のテンポでは旋律と日本語歌詞を一遍に処理仕切れないからである。このように、「もみじ」、「ゆき」、「夢の中へ」などともともと軽快な曲もバラードに近いムードで歌われ、ゆっくりしたテンポではあるが、学習している留学生にとっては実に忙しい作業であることがわかった。こうして教員は「留学生のためのテンポ」という概念を抱くようになった。

このようにして、唱歌教室の体験を留学生に実施した。実施当初の躊躇に対し、今は唱歌教室の効果が確認でき、また、実施の方法についてもある程度確信を持つように至った。

留学生たちの反応

「日本事情」に唱歌の時間を実施した第1から第4学期までの授業終了後の感想文(自由記述100字)から唱歌について言及するコメントを拾い、コーディングをつけて分析した。

各学期において、唱歌についてコメントした学生の数と総受講者数の比は、第1から第4学期の順で記すと8:13、13:21、18:26、と4:22である。また、学期を通して唱歌についてコメントする総回数を、第1から第4学期の順で記すと11、28、70、8となる。このように、唱歌の時間について感想を述べた学生の数が実施の第2と第3学期では半数以上を占めている。

分析した結果、唱歌の時間に対する留学生の感想をいくつかのテーマに集約できた。まず、「歌うことが楽しい」というテーマに属する感想がもっとも多く見られた。歌の楽しさと関連のあるテーマとしては「歌うことを評価する」、「曲や歌詞がいい」、「教員の演奏に感心する」などがあった。いずれも唱歌の時間に肯定的な内容だった。一方、負のコメントもあり、テーマとしては「歌うことの難しさ」と、「歌うことができなくて残念」があった。また、受講者が自分のうちに何らかの変化を遂げた「変化した」というテーマも挙げられた。最後に、歌うことが何らかの心理的効果をもたらす「情緒面の効果」があった。次に、各テーマで得られた感想文の抜粋を示す。

歌うことが楽しい

留学生は授業で歌を歌うことが楽しいと言っていた。歌うこと自体も楽しいが、「みんなと一緒に」歌うから楽しいという意味合いも含む。このテーマに属するコメントの数と唱歌に対するコメントの総数の比を、第1から第4学期の順で記すと5:11、11:28、33:70、2:8である。楽しさをもっとも一般的な反応であることがわかった。ここから学生の感想文を引用する。引用文後の括弧は反応者の識別情報で、凡例を脚注に記載する⁽¹⁰⁾。

実施は最初の学期の受講生は次のように述べた。

(中国語・簡体字) 今天学了新歌「故乡」, 很开心 (23 後 3, 5 Yodi)

(訳) 今日、「ふるさと」という新しい歌を学んだ。とても楽しいです。

久しぶりにたくさんの人と歌って面白いと思います。(23 後 4, 8 Yuchen)

実施して第2、第3学期ではこのテーマに属するコメントは歌に対するコメントの半数近くを占めていてもっとも一般的な感想となっている。

今日の授業はとても楽しかった。新しい歌を歌って、新しい友達と会います。(23 前 4, 5 Tzonda)

歌が好きで、これからもっと歌を勉強したいです。(23 前 4, 3 Sichi)

今日歌を歌うのがとても楽しかったです。たくさん歌わせてください！楽しいです！(23 後 2, 3 Shompong)

今日、皆さんで日本語の歌「若者たち」を歌って楽しかったです。(23 後 2, 4 Sarisa)

全クラスと一緒に歌うことが楽しかったです。(23 後 2, 9 Ulonjun)

歌が好きなので、クラスでみんなと一緒に歌うのがすごく嬉しかったです。(23 後 2, 22 Mariwei)

みんなと一緒に合唱することが楽しいと思います。(23 後 2, 23 Yuhaobo)

ひさしぶりに歌を歌って嬉しいです。私は「夢の中へ」が好きです。(23 後 11, 6 Joshi)

コメントのうち、100 字分の感想を全て歌のことについて書く感想もあり、唱歌時間のインパクトをもの語っている。

(中国語・繁体字) 毎上上課都很喜歡老師會先帶領大家唱頌日本的歌曲，當進了這個環節時都覺得好溫馨！在唱頌時，看到窗外天氣突然轉晴，樹葉被風吹動+藍天+白雲，好似感受到當時來日本時的那股衝動和憧憬之感受！好喜歡每次上課的氛圍感！（23 前 7, 11 YJJ)

(訳文) 毎回、先生がみんなを先に日本の歌を歌うように導いてくれるのが好きで、歌の時間になるととても温かい気持ちになります！歌っていると、窓の外の天気は急に晴れ、風+青空+白い雲に葉が吹かれているのを見て、まるで日本に来たときに感じた衝動と憧れを感じたかのようにでした！このクラスの雰囲気も大好きです！

この授業を取った一年間を振り返ると、一番印象深いのは歌を歌うことだ。「故郷」も「紅葉」も百年前に生まれた歌なんか凄い。百年を経て、これらの曲にまだ癒しの力がある。前にわらべ館に行った。館内にある唱歌教室は昭和早期の小学校の教室の様子を再現している。あんな雰囲気がとても好きで、いっぱい歌を歌った。毎日6時の無線チャイムが鳴ると私は合わせて歌う。「故郷」マジ好き。(23 後 13, 13 Sichi)

実施して第4学期では全体的に歌に言及するコメントが少ないが、次がある。

春の歌を学ぶことができて楽しかったです。歌を歌えるのも含めて自分はこの授業が一番好きです。(24 前 1, 3 Junhi)

以上が、歌うことが楽しいと記した総数 51 のコメントからの抜粋である。受講者たちは斉唱の楽しさを味わったことが明白で、歌うことが楽しい、というのがもっとも共通する感想となっている。

歌うことの難しさ

何名かの学生が歌うことの難しさについて述べた。まず、前述した歌の時間が「不安で仕方なかった」という強い表現の感想文を以下に示す。

芸術のことについて全然勉強したことがなかったです。使えないというかなんとか、あまり関心がなかったです。そのため、美術や音楽の話はあまり共感できなかったです。特に、授業が始まる前の音楽/歌の授業について、何も分からなくて、不安でしかなかったです。

(23 後 4, 10 Jiasin)。

上のコメントは当該学生の教育的背景に起因するものと思われる。学校における音楽の授業は、学校の都合などで実際実施しなかったことは国内外で報告されている。上のコメントは学校で音楽教育に恵まれなかった留学生を代表するような証言と見る。

もうひとり、歌うことの難しさと、自分は苦手であることを教えてくれた。教員との関係上、ある授業内容が得意ではない学生は必ずしも感想に書かないので、当該学生が沈黙の仲間を代弁していると考えていい。

今日は新しい歌を歌いました。最初聞いた時、すごく難しいと思っていました。高すぎますから。でも、実際に歌ってみたら、多分、行けると思います。(23 前 4, 4 Yuchen)

新しい歌はとてもいいと思う。でも、やはり、僕にとって歌うことは難しいなー (23 前 6, 14 Yuchen)

唱歌教育は文化人類学という文化化のプロセスである。唱歌教育に馴染みのない留学生はちょっとした「文化接触」、つまり文化のぶつかりあいを体験することになる。歌うという新しい慣習が自分のうちに形成されるまで、歌うことに戸惑いを感じることは大いにありうる。

変化したこと

歌が苦手と感じた学生がやがて変化した。次のコメントが、唱歌指導を受けて何らかの形で変化したことを示している。まず、態度が変化したコメントとして次がある。

(中国語・簡体字) 今天又学了新的歌, 感觉喜欢上唱歌了, 以前总不敢在别人面前唱歌, 但是

现在唱歌心情会更好! (23 後 11, 13 Mozqin)

(訳文) 今日もまた新しい歌を学びました、歌うことが好きになったみたいです! 今までは人の前で歌う勇気がなかったが、今は歌を歌うと気分が良くなります!

元々、歌はにがてでしたが、先生との授業を通じて楽しくやりました。(23 前 4, 13 Kimyoin)

私はもともと歌を歌うのが苦手ですが、この授業を通じて、歌の楽しみを感じました。「故郷」と「紅葉」が大好きです。中国に帰る後、久しぶりにカラオケに行きたくなります~(23 後 13, 19 Zhozho)

歌詞を覚える、歌を把握するという変化のプロセスを語るコメントとして次がある。

今日とうとう「故郷」を覚えられて良かったです。私は「故郷」という歌がとても好きです。聞いていると懐かしく、ちょっと悲しげになります。歌詞を覚えたんでこれからは道中でも口ずさんでみます(微笑み)。(23 後 13, 18 Junhi)

歌うことができなくて残念（と歌うことに対する期待）

実施して第3学期のある週、時間分配の都合上唱歌の時間を省略した。学生たちが歌うことができなくて残念がっていた。同じ授業日で受講者28名のうち6名が残念の声を上げた。

今日は、歌を歌わなくて、ちょっとざんねんです。(23後10, 4 Sarisa)

今日は歌を歌わなくてとても残念です... ..、歌いたいな～(23後10, 9 Ulonjun)

今日は歌がなかった。やはりちょっと寂しいですね(笑)(23後10, 22 Mariwei)

次のコメントは唱歌時間の休止のインパクトをクリエイティブに描いている。

今日は歌没亡記念日です。やはり歌があれば、より心快くなると思う(23後10, 23 Yuhaobo)

以上が学生が唱歌の時間を期待していた証拠となる。期待を示す他のコメントは以下である。

「夢の中へ」歌うのが友達と楽しみにしてた。(23後1, 23 Shompong)

学生たちは歌うことに馴染めない状態から歌を楽しむようになり、やがては歌の時間を期待するようになった。唱歌の時間が情意的領域で学生に変化をもたらしたことになったに違いない。さらに、唱歌はインパクトのある体験をもたらした。次である。

情緒面でインパクトがあった

もともと音楽を含む芸術活動は個人の内面に強い浸透力を持つ。唱歌がもたらすインパクトとして、まず、歌うことがリラックス効果をもたらすことが挙げられる。

新しい歌(もみじ)を教えてもらいました... ..、リラックスできて楽しかったです。(23後3, 4 Sarisa)

歌を歌うときは、ストレス解消を実感できました。(23後3, 7 Yaosudan)

「夢の中へ」という歌はリズムが気楽で、リラックスな感じがした... ..(23後6, 7 Yaosudan)

大学に入った後にまだ歌える授業あることを驚いたが、楽しかった。日本の文化に触れるし、リラックスもできる。(23後13, 20 Yaosirui)

リラックスよりもインパクトが深いのが癒しの体験だ。一部の学生は唱歌の時間中、気分が改善したと感じた。次である。

今日はこの歌を歌ってもらい、明るい気分がもどりました。(23後11, 17 Van)

日本の歌やピアノを弾いてくださって、聞いたり一緒に歌ったりする時間が厳しい授業の中で癒される感じでとても好きです。(23 後 3, 18 Junhi)

「夏の思い出」はすごく心を癒やされる曲と思います。まだこともでいる時に、よく行った川で遊んだことを思い出しました。その日の日差しと青空は今になっても鮮明に記憶の中から浮かびます。(24 前 4, 11 Chenchen)

今日は「夕焼け小焼け」と「浜辺のうた」を歌いました。すごく心を落ち着ける曲だと思います。(24 前 6, 11 Chenchen)

音楽は人を現実から一時的に離させ作品の世界へ運ぶ力を持つ。唱歌の体験が呼び起こす感情が多様だった。情景を連想させたり、感情を起こしたりする印象が深かったコメントを次に示す。

歌詞はとても綺麗で、「山の麓の裾模様」の画面が頭に浮かぶ。(23 後 3, 25 Shaodalun)

歌いながら頭の中で想像した風景は目の前に現れるような感じでした。(23 後 3, 28 Ciencien)
今日の歌、「夢の中へ」。歌詞を見ると、なんだか悲しい感じがします。(23 後 6, 25 Shaodalun)

授業で歌を歌い終わった時「自分に拍手してください」「あまり自分に拍手しないでしょ」と先生が言ったのが印象に残っています。確かに自分に褒めたり、甘やかしたり、あまりしないことに気付きました。(23 後 11, 3 Shompong)

初めて聞いたのになんか懐かしい気持ち、「若者はまたあるき始める」のところは勇気もらいました。(23 後 2, 28 Chenchen)

今日の歌、「夢の中へ」。歌詞を見ると、なんだか悲しい感じがします。(23 後 6, 25 Shaodalun)

曲のテンポが早くて楽しいけど、歌詞には「探したけれど見つからないのに」なんとなくつらいかも知れないです。(23 後 6, 28 Chenchen)

日本の歌を歌うことが情緒面に与える効果を端的に表現しているのが次のコメントである。

この授業が終わった後、みんなで一緒に歌う姿が一番懐かしい瞬間だと感じます。音楽の魅力を深く感じました。それらの音楽は、ただの歌声以上のもので、共感と連帯感が生まれる瞬間もありました。授業外でさえ、その歌の旋律が心に残り、友情と学びの絆を深めていました。歌を歌った時、個々の違いが融合し、一つの調和となりました。その響きは教室の中で回っている雰囲気がとても好きでした。(23 後 13, 7 Yaosudan)

上のコメントは実に唱歌が多側面にもたらす効果を示した。特筆すべきは、学習者が歌うことが連帯感をもたらすこと、歌の影響が授業外まで持続すること、そして、何よりも音の響きに囲まれ

た体験について触れたことである。このように、唱歌活動が歌われた内容だけでなく、対人関係や体で感じる音響環境まで効果を及ぼした。

討論

留学生にとって歌うことの意義

毎週 15 分程度の歌唱時間は留学生にとってどのような意味があったのか。学生の感想文を分析した結果、次のことが言える。

まず、唱歌は留学生にとってちょっとした文化のぶつかりあいである。多くの国々で歌の斉唱が義務教育の一部を構成しているが、実施の実態が様々である。本試みに対する感想文でもあったように、歌うことに対する戸惑いを表す意見があった。また、単に歌うことに対する戸惑いではなく、日本語で歌うことも一部の留学生にとって新しいことであった。

しかし、最初の戸惑いを除けば、多くの留学生は日本唱歌の時間が楽しいと感じていた。「楽しい」、「歌えて嬉しい」、「久しぶりに歌えて楽しい」、「新しい歌を学べて楽しい」などの意見多数あった。留学生はまた、毎週の歌の時間を期待していた。ある週の授業日に歌の時間が省かれると、「残念」、「悲しい」の意見が寄せられ、「今日は歌没亡記念日です」のように造語まで作って遺憾の意を表した。

授業の導入として歌の時間は効果的であることがわかった。学生の証言からも「冒頭に歌を歌ってから授業を始める授業方法が好きです」とあった。「楽しさ」と言えば感情として表面的で軽いと思われるかもしれないが、日本で留学をしていた筆者自身の経験からも、人とインタラクションが少ない生活を送る留学生にとって、他人と一緒に共有できる「楽しさ」の時間は貴重で重みがある。よって、「楽しい」や「一緒に歌うことが楽しい」の証言は留学生の視点からみて有意義で軽視できない。

そして、歌を歌うことが留学生にもたらす最大の効果は情緒面にあることがわかった。「歌を歌う時は、ストレス解消を実感できました」が語るように、留学生たちは歌を歌うことでリラックスでき、癒しを感じていた。感想文の中の最も頻繁なことばとして「楽しい」の次が「リラックス」であった。学生がまた自ら癒しという表現を使った。例えば、「一緒に歌ったりする時間が厳しい授業の中で癒される感じでとても好きです」、「夏の思い出」はすごく心を癒やされる曲だと思います」などがあり、また「気分が明るくなった」、「心を落ち着ける」とも書いた。このことから、カルチャーショックの最中にある留学生たちは、少なくともその一部の学生において、唱歌活動はセラピーになったと言える。

歌がもたらす情緒面の効果はストレス関連のものに限らない。歌詞と旋律の媒体を通して、学生たちは想像の世界や感情の境地に一時的に入ることができた。例えば、「歌いながら想像した風景が目の前に現れるような感じでした」、「山の麓の裾模様」の画面が頭に浮かぶ」、「歌詞を見ると、なんだか悲しい感じがします」など、また「(歌詞から) 勇気をもらいました」がそうである。歌を含む芸術の力の一つは、関わる人に知性と感性に働きかけ、さらに新しいアイディア、考え、感情を誘発することである。

エンボディメントの教育

「日本事情」に日本の歌を導入することについて、教員の視点から見れば次のことが言える。

教師が行った観察の結果、留学生による唱歌の学習はエンボディメントのプロセスであったと言える。エンボディメントは、Oxford Languages⁽¹¹⁾ によれば「ある事物を具体的形、あるいは目の見える形で表現、または表象すること」（筆者訳）とあるが、文化人類学的視点からは、私はあえて「身体化」という言葉を使いたい。ある事物が当事者の体を通して具現化するという意味合いである。その反対はある事物が頭の中で理解されることである。

感想文で見られるように、誰でもすぐに歌を学習する体勢に入れると限らない。人によっては、適応をする必要があるし、そのための時間も必要である。学生たちは、最初の頃の、歌うことに対する戸惑いから歌うことを楽しむようになり、より積極的に歌うようになった。知識と関わりを持たせようとする教員の狙いに関して言えば、留学生は体を使って歌うことを通して、「日本」（ここでは唱歌という文化）を自分のものとして関わっていったのである。文化人類学の語彙を借りれば、本取り組みは留学生に対する日本の唱歌の文化化に成功したと言える。歌を覚え、体を駆使して教室で斉唱することは、さまざまな文化記号を総合的に体験することによって、生きた「日本」を経験することになる。

一方、唱歌の導入は留学生の感性の訓練でもあることがわかった。自然や季節への感性の表現が優れる日本の歌。学生は、旋律と歌詞が生み出す詩的織体を自ら再現することで、言葉、音、動き、構造などさまざまな側面への感受性が同時に磨かれる。これは美的教育他ならない。

このように留学生のための唱歌の時間は異文化理解教育と美的教育の両面をもつ。

文化的テキストとしての歌

ここで日本の唱歌を留学生に教える行為について文化論の面からも考えてみよう。歌はことばによるテキストでできている以上、歌を歌うことは必然的に日本語教育の延長線になりうる。学習者は教科書で定型化された以外の日本語表記や文体に接する。ことばである歌詞が読み解けて、内容が理解されると、学習者は歌を鑑賞する段階に進む。そこに鑑賞される対象として、文化的テキストとしての歌がある。文化的テキストとは、作品そのものを指すが、共通記憶の中身を示す記号である構造に織らせて具現化したものだ。歌を学ぶことは、作品の構造をそのまま受け入れることでもある。以上が唱歌を文化的テキストとして留学生に伝授することに対する基本理解である。

ここで、唱歌という文化的テキストの伝授が、過去 30 年あまりで主流の一つとなってきたポストモダンの文化に対する考え方と趣が異なることを指摘したい。

「日本事情」の実施が文化の固有視に陥ると批判する指摘が 2001 年頃からあった。日本文化を単一不変の形で存在するかのように留学生に教えることに対する批判だ。川上郁雄は⁽¹²⁾、留学生に教える日本語が「想像された日本語」であり、日本事情で教える文化は「想像された日本の文化」とまで指摘した。文化固有説に対する批判が端的に走れば、長沼や細川⁽¹³⁾の著作に見られるように、「日本事情」は日本の文化について教えるという授業目標自体が成立できなくなる。

このような、文化は流動的なものであるという見地からみて、日本の唱歌を導入することはどのような意味を持つのか。唱歌を文化的テキストとして導入することは、ある集団の共通記憶を体得させることだ。記号論の見地からは、学習者は歌にある記号の数々を通して、ある集団の感情や感受性にアクセスすることができる。しかし、唱歌を再現することは、やはりトップダウンのやり方で、あるものをスタンダードとして進めることに他ならない。文化を固有なものとして植え付けることと言われても反論できないでいる。プロテスタント教会で始まった斉唱（後ほど学校で唱歌と

呼ばれる形と同一) という社会行為の形式は、もともと人間を集合させる力を持っていて、個人主義、文化相対主義など「個」の違いを重視するポストモダンの方向と趣が異なる。

むすび

まとめとして、文頭で提示した問いに答える。

まず、日本の歌を歌わせたことが、授業プラクティスにどのような効果があったのか、については、唱歌の体験が授業の雰囲気を楽しくさせ、リラックス、ストレス解消、気持ちを明るくするなど情緒面の効果があることが明白である。唱歌の時間は、日本の独特の文化である唱歌を伝えること、美的感受性を育てること、また留学生が受けるカルチャー・ショックを緩和させることができると言える。

次に、日本の歌を歌わせたことが、難解な「留学生のための授業」という教育課題の理解にどのような広がりを見せたか、については、「日本」を自分のものとして関わっていくという、関わりを持って異文化に接する授業のアプローチは成功したと言える。「日本事情」の授業にエンボディメントのアプローチを付け加えたことで評価できるのではないかな。

留学生のための授業に日本の歌を導入することは、ストレス解消と学習意欲の促進に効果的であると言える。日本独特の唱歌文化を日本社会の現象の一つとして留学生に紹介することを通して、大学を含む日本の社会での生活において物事を関連付け、意味付けする手立てを提供し、留学生生活をスムーズに展開できるようにさせる役割を持つことができると考える。唱歌が情緒面にもたらす効果をこれからも大いに応用したい。

懸念点としては、日本の文化とは何かという根本的な問題で、唱歌を再現することが、場合によっては存在しない日本のスタンダードを植え付けることになりかねないことである。唱歌の集団性・同化主義に対するポストモダンの批判も受け止め、教育場面で扱う文化とは何かという根本問題を考え続けていきたい。

注

- (1) 文部科学省による科目名「日本事情」は総称で、鳥取大学ではこの総称のもと、「日本社会事情」と「日本文化事情」という科目が設置されている。歌の導入を試みた授業は「日本文化事情」だが、本稿では、「日本事情」と「日本文化事情」を区別せずに扱う。
- (2) 日本の大学で留学生のために設置する科目「日本事情」は、「大学設置基準の特例」のもと、単位取得できる科目として設置された。昭和37年の文部省令21号およびそれについての4年制大学学長宛の通知によれば、「日本事情」科目設置の趣旨は、「留学生の履修上の負担の軽減をはかることを目的」としながらも、「一般教養科目の趣旨と同様の意図を実現できるよう」とあり、教育水準は「大学教育の水準に応じた」ものでなければならない。教育内容は、「一般日本事情、日本の歴史、文化、政治、日本の事前、日本の科学技術といったもの」。
- (3) 安田芳子・小川早百合(2000)「大学教育の目標から見た『日本事情』教育」21世紀の『日本事情』編集委員会(編)『シリーズ21世紀の「日本事情」第2号』くろしお, pp.66-76.
- (4) 長谷川恒雄(1999)「日本事情：その歴史的展開」21世紀の『日本事情』編集委員会(編)『シリーズ21世紀の「日本事情」創刊号』くろしお, pp.4-14.

- (5) 古川治 (2015) 「B.S.ブルーム理論の日本における需要と発展：評価理論を発展させた梶田理論を通して」『甲南大学教職教育センター年報・研究報告書』2014年度 pp.13-28. <http://doi.org/10.14990/00001625>
- (6) 教育目標教育目標を設定する際広く使われるブルームの分類学によれば、教育目標には三つの領域があり、すなわち認知的領域、精神運動的領域、情意的領域である。
- (7) 最近の流れでは、「適応主義」ということばが使われるように、単なる適応だけでは大学の授業目標として足りないという意見まであった。安田と小川氏(注3)は、大学教育の目標に沿って、分析によって普遍性を見出す能力の育成までをも「日本事情」が担うべきだと考えた。
- (8) 「適応主義」に対する批判は、異文化への適応プロセスを狭く捉えすぎる嫌いがある。ここで論議されている「適応」は、コンプライアンスという意味で、英語の conform、順応と同じ意味で用いられよう。しかし、英語でいう適応、adapt はもっと意味合いが広い。文化的適応能力は大学教育目標として水準以下という見解には賛同できない。
- (9) 本稿では筆者と教員は同一人物である。
- (10) 凡例：(23 後 3, 5 Yodi) は 2023 年後期 3 回目の講義、受講者番号 5 の Yodi という留学生のことを指す。名前は仮名。
- (11) <https://languages.oup.com/google-dictionary-en/>
- (12) 川上郁雄 (1999) 『『日本事情』教育における文化の問題』21 世紀の『日本事情』編集委員会 (編) 『シリーズ 21 世紀の「日本事情」創刊号』くろしお, pp.16-26.
- (13) 長沼行太郎 (2000) 「日本の文化を越える 日本語ネイティブにとっての国語教育と文化リテラシー：細川英雄著『日本語教育と日本事情 異文化をこえる』に触れて」21 世紀の『日本事情』編集委員会 (編) 『21 世紀の「日本事情」第 2 号』くろしお, pp.66-77.